

ナデシコ科ハコベ属の越年草あるいは多年草。北海道から九州まで、日本全土の道端、畦畔、畑地、山野などどこにでもふつうに見られる。背丈は20cm～50cm、茎は円柱形で節部分は紫色を帯びる。葉は卵形で対生し、下部の葉は小さく葉柄があり、上部の葉は大きく無柄で茎を抱く。葉身の長さは2cm～8cm、両面無毛。花は4月～6月に多いが、春から秋まで咲き、年中咲いていることもある。上部の葉腋に集散花序をつけるかあるいは単生する。花弁は5枚で白色、基部まで深く2裂し、10花弁に見える。雄蕊は10本、雌蕊は花柱が5つに分かれる。いわゆる繁縷と呼ばれるミドリハコベやコハコベよりも大型であるが、3者ともよく似ており区別するのはなかなか難しい。区別するには雌蕊の先をルーペで確認し、花柱が5つであればウシハコベで、ミドリハコベやコハコベは3つである。

本誌第51巻11号のコハコベで触れたが、繁縷は春の七草のひとつであるが近代まで歌や俳句などに取り上げられることはほとんどなかった。

そんな中で、近代の詩人で作家である島崎藤村が「小諸なる古城のほとり」を吟じた。

「小諸なる古城のほとり / 雲白く遊子^{ゆうし}悲しむ / 緑なす繁縷は萌えず / 若草も^し藉くによしなし / しろがねの衾^{ふすま}の岡辺 / 日に溶けて淡雪流る / ……」

五七調でリズムが良く言葉が流れていく。

藤村は、1899年（明治32年）、恩師である木村熊二に招かれ小諸に開塾していた小諸義塾の英語と国語の教師として赴任してきた。それまでの藤村は交流していた北村透谷の自殺、兄の逮捕投獄、母の縫の死、教え子で初恋の佐藤輔子の病没などが続いた。

そんな藤村が佐久へ下ってきて2年目の春、藤村29歳の時、小諸の懷古園で詠んだ詩が「小諸なる古城のほとり」であった。（のちに別の詩と合わせて「千曲川旅情のうた 一、二」となった。）

小諸にある懷古園に佇み、右手に浅間山を眺め眼下に千曲川の流れを見下ろす。旅人は懷古園にあって、白い雲を見上げて

須藤 健一

いると旅の愁いが増してくるのであった。足元にはあちこちに繁縷がみえるが、春まだ浅く冬のままである。若草もまだ十分に伸びてはおらず敷いて座することもできない。目を遠く浅間山に向けると、浅間山の手前の岡に先日降った雪が白い布団のように横たわっているが、その雪が春の陽に溶けて千曲川へと流れていく。

「小諸なる古城のほとり」は三連からなり、第二連では古城から眼下の春霞の中を急いでいる旅人たちを眺め、第三連では古城から千曲川沿いまで下り、川沿いの宿で独り濁り酒を飲みながら旅の寂寥を慰めている、という詩である。様々な事件が相次ぎ意気阻喪していた藤村が妻を娶り、子にも恵まれ、それまでの心労が癒されてきていた時であった。

藤村の「小諸なる古城のほとり」の吟詠のきっかけのひとつとなった繁縷は何だったのだろうか。繁縷は越年草であり春には冬を越した株が目についていたはずである。しかしその繁縷はまだ「萌え」（芽がしっかりと出て）てはおらずいくつかの小さな繁縷の塊があるだけであった。それでも繁縷が目についたということは、ミドリハコベより大型のウシハコベではなかったかと想像してみる。

